イノセンス

水花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イノセンス

【Ｎコード】
Ｎ７２８７Ｕ

【作者名】
水花

【あらすじ】
染織職人の家に五番目の子供が生まれた。他の四人とは全く似ていない飛び抜けて綺麗な男の子だ。何かを欲するという当たり前の感情を持たずに生まれ成長するアイリスと、〈金の君〉は出逢う。
★サイトより転載作品★「きみのためにできること」のエリック転生後の物語です。永遠を生きる〈金の君〉が個人に興味を持つのは禁忌・・・・・・そして二人の行く末は。
「・・・あなたはわたしを何だと思う？ヒト？それともアヤカシかしら？」

「何だっていいよ。傍にいたいし、そばにいてほしい。贈り物をしたいのもあんただけだ。俺がどれほど嬉しかったか、あんたにはわかる？ヒトでもモノでも・・・言葉でも、俺の中には何一つ響かないけど、あんたと居る時だけは違うんだ。だから、あんたが何者でも構わない」

「・・・そこまで熱烈に口説かれちゃ、ほだされちゃいそうだわ」

「ほだされてくれよ・・・俺を、好きになって？」

答えるかわりに、彼女は白い腕を彼に伸ばしたのだった。

彼の名前

ファニー・メイの五番目の子どもは、男の子だった。
彼女の夫は、自分たちもそろそろいい歳であるし、これが最後の子どもだろうと思っていて、末っ子には女の子を望んでいた。何しろ上二人が双子の兄弟、その下が少し空けて年子の姉妹。その姉妹からも些か年が空いているから、年を取った自分たちからしてみれば、女の子の方が育て易かろうと思ったのである。
　けれどいざ産まれてみれば、子どもは男の子だった。
もちろん、そうだからといって彼女の夫は落胆などしなかったし、元気で産まれてくれて嬉しいとも思った。出産の疲労で寝台に沈み込んでいた彼女に見えるよう、産まれたばかりの子どもを抱きあげて見せてやる。
元気な子だ、頑張ったなと声をかけると、彼女は濃い疲労を顔に浮かべながら、微笑んでわが子を見つめた。そして、あらまあと声をあげる。
なんて綺麗な瞳でしょう。ねえあなた、わたし、この子の名前を決めたわ。
夫は彼女の告げる名前に言葉を失った。なぜならそれは。

鋭い剣先を思わせる葉を持つ花を、ファニー・メイは花瓶に生けていた。それは家の裏の畑で咲いたものだ。畑に植えている植物は、染料の材料となるものが殆どであるが、彼女の好きな花も幾つか植えられていた。
その一つがこの青い花である。
鼻歌交じりに家じゅうの花瓶を、同じ花で一杯にしていると、彼女の五番目の子どもが帰ってきた。
　花瓶に飾られた花を見て、呆れた顔を隠さない。また同じ花ばかり飾ってと文句を言うが、彼女は耳を貸さなかった。

だって、綺麗なんですもの。ねえ。
「だってアイリス。ことしも綺麗にアイリスが咲いたのよ」
「紛らわしい言い方しないで欲しいんだけどな。それと何だかむず痒くなってくるんだけど」
「あらまあ、こんなに綺麗な花なのに？あんたの目の色と同じ色よ」
アイリス。そう彼女の五番目の子どもは名づけられた。
ファニー・メイは子どもの青い瞳を見るや、この子にはこの名前しかないと思ったと、あとで夫に語った。
確かに子どもの瞳の色は、見事なアイリス・ブルーであったし、彼女の気持ちもわからないではなかったが、しかし。
彼女の五番目の子どもは、男の子であった。
似合っていないとは言わないが、成長した後、いささか可哀そうな名前ではないかと、夫は妻に考え直すよう促したのだ。
するとファニー・メイはとても不思議そうな顔で夫を見て、輝くような笑顔で首を振った。
似合っているなら、なぜ名前を考え直す必要があるのと。
頑固な職人であるはずの夫も、妻にはほとほと弱かった。
かくして、彼女の五番目の子どもの名前が決定したのである。

「まったく、父さんがもう少し反対してくれてたらよかったのに」
彼女の子どもも、自分の名が名づけられた経緯を知っていた。両親は勿論、年長の兄姉たちから、小さな頃から聞かされていたのだ。兄弟にとっては笑い話なのだろうが、当の本人にとっては笑い飛ばせない話らしい。
そう文句を言う子どもに、ファニー・メイは花瓶から花を一本抜きとると、子どもの顔の傍に当ててうっとりと眺める。
「いいじゃない、あんたに似合ってる名前じゃないの。ほら、目の色と同じ綺麗な青よ」
染料じゃとうてい出ない、綺麗な青い色ね。
歌うように言う彼女に、子どもは処置なしと天を仰ぐしぐさをする。

追い打ちをかけるように、彼女はそれにと言葉を続けた。
「それに、名前と棺桶は、自分じゃ選べないのよ？似合ってる名前を貰ったことに、感謝なさいな」
「それを知ったうえで、敢えてこの名前を俺につけたあたり、母さんもいい性格してるよな・・・」
何か言ったかしらとファニー・メイは笑い、彼女の子どもは何も言ってないよと首を振る。

ファニー・メイはこの暮らしを幸せだと思っていた。染織職人の夫は、頑固で気難しい所があるが、自分にも子どもにも優しい人だ。五人の子どもたちも元気で、日々の生活にも大きな不安はない。勿論、幾らか波風はあるけれど、それは何処の家庭にだってあるものだろう。子どもたちの世話や、家の切り盛り、また夫の仕事の事など、彼女の日々は忙しくて、何かを思い悩む暇など何処にもなかった。
けれど。
「ああ、アイリス。今度あんたの誕生日でしょう？何か欲しいものはある？」

高価な物は贈ってやれないが、誕生日くらい子どもが欲しがるものをやろうじゃないかと、ファニー・メイは夫と相談して決めていた。子どもたちが幼い頃からの、それは習慣だった。
職人であり商売人である父や、店場に立つ母は普段はとても忙しく、そうそう我儘など言えないことは、彼女の子どもたちにはわかっていた。まして子どもだからという理由で、家の仕事と無縁でもいられず、年に応じた手伝いにも駆り出されていたからだ。
普段何もしてやれないぶん、せめて誕生日くらいはと彼女と夫は思っていたのだ。どの子も誕生日が近付くにつれ、そわそわと落ち着きがなくなるのが常だった。それをほほえましく、また時には厳し

い言葉を言いながら・・・“あまりヘマばかりするなら、ことしはプレゼントなしにするわよ！”・・・彼女と夫は子どもたちを見守っていたのだった。

すでに他の子どもたちは成人していたから、この問いかけをするのは五番目の子どもに対してだけだ。
そしてこの問いかけに少し困ったような顔をするのも、この子だけだった。
「別に・・・特に欲しいものもないからなあ」
　別になんでもいいよと答える子どもに、ファニー・メイはため息をつく。
あんた、毎年そう言ってるじゃないの、欲しいものはないのと尋ねても、子どもは首を振るばかり。
「そうだっけ？」
　ファニー・メイはますます深いため息をつく。子どもは、プレゼントなんてなんでもいいよと答えて、自分の部屋の方へ行ってしまった。
　色んなものが欲しい年頃だろうに、何故あの子はこうなのかと、彼女は不思議に思うのだ。
もちろん、欲しがりすぎるのもよくないが、あの子は欲しがらなさすぎる。
思えば、あの子は小さい頃からそうだったと。
　たとえば、兄弟におやつを出すとき。食べざかりの上の兄姉たちは、我先に手を出すのに比べ、あの子は皆よりだいぶ遅れて、皿に残ったものに手を出していた。それも、食べなさいよと促されるまで取らないこともよくあった。
種類の違うものを出したときもそうだ。兄姉たちは、自分はどれが欲しいこれが欲しいと言いあうのに、あの子はそれに見向きもしないで、ひとり輪の外にいた。たまにどれが欲しいのか問われても、どれでもいい、残ったのでいいと答えていたように思う。

兄姉たちと年は多少離れているが、同じように育ててきたつもりなのに、何故あの子一人だけが違うのだろうと、ふとしたときに疑問が頭を過るのだ。

いや・・・他の子どもたちと違っているのは構わない。ファニー・メイが何より気にしているのは、五番目の子どもが、あまりにも何も欲しがらないことだ。無欲は美徳であると人は言うが、ほんの子どもが無欲であるというのは・・・どこか変じゃあないだろうか。夫に相談してみたが、気にするようなことじゃあるまいと彼は答え、ファニー・メイの不安を和らげてはくれなかった。

ファニー・メイは青い花を前にして考える。

いつか・・・いつの日にか、あの子が心底何かに焦がれることがあればいいのにと。

焦がれて焦がれて・・・それでも得られない時は、大変な苦しみとなるのだろうが、それでも。

何も感じず、何も望まず、何にも執着せず過ごすよりは余程いいのではないかと、彼女は思うのだ。

それは、アイリスの花だけが知っている、彼女の秘かな願いである。

やさしいうそ。

怒涛のように様々な問題が次から次へと起こった日々から、はや数年が経った。
彼が・・・周囲にはそれと知られていないが・・・後見のような形で見守り導いていた銀の界の“君”となった少年自身も、少年の周りも、今ではかなり落ち着きを見せている。
銀の界も、狭間の界も、日々小さな問題はあるものの、大きな問題は起こっておらず、そのためジルファはすっかり気を抜いていた。
だから、その光景を目にした時、とても衝撃を受けたのかもしれない。

「金の界の市場にくるのも、久しぶりだなあ」
鼻歌交じりに独り言をいいながら、ジルファは人でごった返す市場を歩いていた。ものを売り買いをする活気にあふれた声が、あちこちで響き、まことに喧しい。
賑やかで結構なことだと、ジルファは屋台の一つで買った焼き菓子をかじっていた。捩じった生地を油で揚げており、砂糖がまぶしてあって、甘くておいしい。
「リルフィも来ればよかったのにな」
銀の界も狭間の界も落ち着いているし、たまには金の界に戻ってのんびりしよう、美味しいものでも食べに行こうと誘ってみたものの、彼女から返ったのは色よい返事ではなく。冷たい視線ととげとげしい声であった。
あたしとあんたが？二人で？冗談じゃないわよ、莫迦は休み休み言いなさい。
息継ぎもせずに彼女は言い、ジルファはのんびりと聞き返した。

え、じゃあゆっくり話したら一緒に来てくれるんだ？
・・・行きませんっ。あんたとなんか、一緒に行くもんですか～っ。
しゃああっと威嚇するように金色の羽を広げられ、危うく鋭い嘴でつつかれるところを、うん、じゃあまた今度行こうねと言い残し、ジルファは狭間の界を後にしたのだった。
出かける前に、狭間の界の、リルフィが守る少女の家で交わした会話を思い出し、ジルファはくすりと笑った。
「リルフィってば、照れなくてもいいのにな～・・・あれ？」
彼女が聞けば、照れてなんているものですかと絶叫間違いなしのことを、ジルファはさらりと呟く。
そこへ、視線の先を、金の髪の人物が横切って行った。もちろん金の髪の人間なんて掃いて捨てるほどいる。
ジルファが目を瞠ったのは、その人物が見知ったひとであり、なおかつ、この場に居る筈のないひとであったから。
「う～ん、またお忍びで出かけてるんだろうなあ・・・ここでついでに挨拶しておこうかな。宮までいくと、余計な事まで聞かれそうだしね」
そうしようと頷いて、ジルファはその人物が消えた方向へと歩き出した。

市場の大通りから一本路地を入ると、途端に人通りが少なくなった。店が立ち並ぶ面の裏手に当たるようで、市がにぎわう時間帯は、通りかかる人は少ないのだろう。菓子を食べながらのんびり歩いて行くと、一休みできそうな東屋があり、石造りのベンチがあるのが見えた。そして、そこに腰かけて、何やら話している様子の人影が、ふたつ。
「あの人は一体誰と話してるんだ・・・・て、あれは、まさか・・・っ」

もう少しで食べかけの菓子を取り落とすところだった。一つは彼が追いかけてきた人物であり、もう片方は。
「こんなとこで会うとは思わなかったけど、それにしてもあの人は何で関わりあいになってるんだか。彼のためには、私たちは関わりあいにならない方がいいと思うんだけどな。あの人の考える事はわからない」
ジルファは低く唸った。
再びまみえる可能性を考えなかったと言えば嘘になる。狭間の界にいる少女が、“彼”と再会したように。
けれど、それはとても低いとも思っていた。砂浜で金の粒を探すようなものだからだ。
そしてなにより、今の彼は、以前の彼ではないのだから・・・まったくの別人として、新たな生を生きる彼に自分たちが不用意に関わるべきではないとも。
ジルファは咄嗟に物陰に身を隠し、彼らの会話に耳を澄ませる。親しさがうかがえる、楽しそうな会話が耳に飛び込んできた。

「・・・だからなんで、俺がティナに怒られなきゃならないのか、ちっともわからないんだ」
「あら、それはあなたが悪いわよ。ティナが怒るのももっともだわね」
「それがわからないんだって。教えてくれよ」
「ふふ、自分で考えなさい」
「ちぇー・・・ああそうだ、俺あんたに聞こうと思ってたことがあるんだけど」
「なあに、あらたまって。わたしに答えられることならいいわよ」
「聞くっていうか。教えて欲しいんだ、あんたの名前」
「え・・・・？」
「ほら、顔会わせて話するようになって随分たつけど、よく考えたら俺、あんたの名前も知らないし、俺の名前も言ってない、よな？」

「ええそうね、でもお互いここで会って話をするだけなら、名前を知らない同士でも不都合なんてないじゃない？それじゃいけないのかしら？」
「確かにそうだけど・・・俺が、知りたいんだよ、あんたの名前。教えてくれないかな。俺の名前は、アイリス。イリスって呼ばれてる」
「アイリス。そう・・・花の名前ね。花と同じ青色の瞳ですものね。可愛らしい名前だこと」
「それを言われるのが嫌なんだって。で、あんたの名前は教えてくれないの？」
「ふふふ・・・いいわよ。あのね、私の名前はヒース、よ」
「ヒースって・・・男の名前だよな」
「似合わないかしら？私は割と気にいっているんだけど。なぜって、荒れ地に咲く花の名前だからよ」
「ああ、図太そうなところは、あんたに似合いかもしれないな。怒るなって、冗談だって。俺はその花見たことがないんだ。今度見せてくれるか？」
「いいわよ、今度花が咲く時期に見せてあげるわ。小さな、薄い紅色の花が、たくさん枝についているの。荒れ地に一斉に咲くさまは、見ごたえあるのよ」
「それもいつか見たいな・・・ああ、俺そろそろ行かなきゃ。じゃあ、また」
「ええ、またね」

声とともに、気配が遠ざかる。完全に一つの気配が消えるのを待って、ジルファは物陰から姿を現した。彼がこの場に居ることに、かの方はとうに気が付いていたのだろう。にこりと花が咲くように笑い、手招いた。
「あらジルファ、こちらに戻ってくるのは久しぶりね。元気そうで

よかったわ。あの子たちも変わりなくて？」
「ええ、皆元気でやっていますよ。ところで今のは、彼ですね？やはり金の界に転生していたんですか」
「そうね・・・流石に好き勝手がすぎた銀の君も、兄弟一緒の界に送るには、理を歪めすぎると思ったんでしょう。ディーンは狭間の界を望んでいたから、あの子には・・・エリックには金の界しか残されていなかった。そもそも、転生を望んでいたかすら、疑わしいのだけどね」
　長い金の髪を弄びながら、彼女は・・・この金の界を統べる金の君、稀なる方はあどけない様子で首を傾げる。ジルファは気まぐれな冷酷さで王妃に次いで恐れられていた、かつての銀の界の王子を思い出す。
兄より余程王妃の気質を受け継ぎ、己の欲や望みのためなら、他人の血を流すことに躊躇いがない、そのような存在に見えていた。
　けれど、あの落差はどういうことだろう。
「先ほどの少年が、かつての銀の界の王子、その人が転生したものだと、私たちにはわかります。伝わる魂の波動は間違えようがない。しかし・・・顔立ちもなにもかも以前のままなのに、どこかまるで違うように見えるのは・・・これが“転生”というものの、功なのでしょうか」
　先ほどの少年の瞳には、荒んだ色も冷酷さも見当たらなかった。この界に暮らすあたりまえの少年に見えた。
「ええ、功ではあるでしょう・・・けれど、やはり無理な転生には歪みが出たわ。あの子の魂には、消しきれない傷が残っている。それが多分、あの子を苦しめることになるわね」
　金の君は物憂げに呟いた。その口調はかつて、銀の界における王妃王子らを非難していたものではなく、自らの裡に入れたものに対する気遣わしげなものだということに・・・彼女は気付いているのだろうか。
「傷とは、一体どのようなものでしょう」

金の君は目を伏せる。
「まだ現れてはいない・・・でも、そろそろ彼の近しい者は気付くはずよ。そして彼自身も」
それきり彼女は口をつぐんでしまう。ジルファもそれ以上の答えは求めなかった。
答えを聞いたとして、自分に出来る事は何もないと知っていたからだ。その代わりに聞いたのは別のこと。
「御方様。あなたは一体いつ、かつての銀の界の王子に会ったんですか。昨日今日ではないのでしょう？」
「ええそうよ。あの子をわたしが抱きあげられるくらい、小さな頃に会ったわ。それから時々、ここで会ってるのよ。もう何年前になるかしら。お忍びで市場を歩いていたら、迷子になってたあの子を見つけたの。本当に驚いたわよ」
「・・・御方様。私の言いたいことがおわかりですよね。偶然なら仕方がない。けれど、何故何度も会うなどしたんですか。彼にとって、貴方と関わりあいになることが、良いこととは思えないのですが」
ええそうねと彼女は頷き、でもねと続けた。
「でもね、きっとそう長いことじゃあ、ないわ。こうして会うのもそろそろ終わりよ。あの子も何か変だって気付いているのじゃないかしらね・・・だって、私は、ずっとこのままの姿を通しているんですものね」
「終わりになるとは思えませんが。だいいち、彼は貴方に名を尋ねましたよ。まだこれからも会いたいと思っているのではないんでしょうか。貴方は気付いていないんですか、彼が貴方を見る目に」
「・・・さあ？ジルファ、貴方は何を言いたいのかしら、私にはわからないわ」
そうですかとジルファは深く息をついた。
金の君はすでに何事かを決めてしまっている。もはや彼が何を言おうが、動かすことは出来ないのだとわかってしまった。

「願わくば、貴方自身が騒動の種にならないよう、お願いしますよ」
それでは私はこれでと、ジルファは金の君に背を向ける。
リルフィによろしくねと、鈴を鳴らすような声が背中越しに聞こえた・・・。

金の界に遊びにきたつもりが、何やら余計な悩みの種を背負い込んでしまったジルファは、憂鬱な気分を晴らすべく市場を歩きだしたのだった。

いわない。

そんなの、とっくの昔に気付いていたわ。

誰にも見つからないように、こっそり作っていた秘密の通り道を抜けて宮に戻ってきたつもりだったが、出口にはすでにチェスミーが腕組みをして待ち構えていた。彼女の口の端は、変なふうに引きつっている。

あら、これはまずいわね、怒らせちゃったかしら・・・？

先制攻撃とばかりに、彼女に仕えてくれる女性に、にこりと笑いかける。眩いばかりの金の髪、扇のように広がる長い睫毛の奥の瞳は霧に煙る湖のようで、誰もが魅了されるような美しさなのだが。

彼女に仕えて長いチェスミーには、その魅力に対する耐性が出来ていた。

いつもいつも、にっこり笑ってごまかされちゃ、たまらないわというのが、チェスミーの心からの叫びである。

実のところ、いまだに金の君が見せる美しさに夢見心地になることもしばしばの彼女であるが、このたびはそれ以上に怒っていたのであった。

「・・・御方様、お早いお帰り、大変嬉しく思います」

「ただいま。出迎えありがとう」

「いいえ、当然の事ですので。ところで、御方様はどちらへお出かけだったんですか？」

「・・・言わなきゃ駄目なの？いいじゃない、ちょっとした散歩よ。わたしには自分が治める界を見て回る自由すら、ないのかしら」

「そういう事を言ってるんじゃありませんっ。それなら一言言い置いて下さいとお願いしてるんですっ。ふらっと急にいなくならないでください、お願いですから！」

「ええ～行き先言っちゃったら、お忍びじゃあ、ないじゃない」
「・・・御方様？わたしにも考えがありますよ・・・？」
「あら、なあにチェスミー」
「今日のおやつはシュエが腕によりをかけた木イチゴとカスタードのタルトですが。御方様は今日はお召し上がりになりたくないと伝えておきましょう」
「いやあああっ、それだけはやめて頂戴っ。彼女のタルトは絶品なのにっ。わかったわよ、これからはちゃんと事前に言ってから出かけるわよ」
「わかっていただけて嬉しく思います」
　チェスミーはにっこり笑って頭を下げる。金の君は対照的に、唇を尖らせて腕組みをした。
内心では、ほとぼりが冷めたら、また内緒で出かけてやるんだからと思っていたのだ。それを見透かしたようにチェスミーは言う。
「ああそうだ、この道は閉鎖させていただきますよ。それにもしまたわたしたちに隠れて出かけられたら。今度こそ、シュエのお菓子は食べられなくなると思っておいて下さいね」
　では、お茶の用意をしてまいります。
チェスミーが奥へと入っていくのを、金の君は憮然とした表情で見つめた。付き合いも長くなると、行動パターンを読まれてしまい、やりにくいことこの上ない。
　金の君がお菓子に一喜一憂している時点で、他の者たちからすると唖然とするような事態なのだが、ここにはそれを指摘出来る者は皆無だった。
「うう・・・シュエのお菓子が禁止になったら、私泣けるわよ・・・仕方ないわね、しばらく大人しくしていましょうか」
　金の君は回廊を歩き、居間として使っている部屋に入る。淡いクリーム色の石がふんだんに使われた宮の中は、穏やかな光で満ちている。そろそろこの宮の形にも飽きたから、別の形、色に変えましょうかねと金の君は頭の隅で思った。

大きく窓が取られ、外光がふんだんに入ってくる部屋は、天井から色鮮やかな布がたくさん垂らされていて、風でそれらがなびくさまはまことに涼しげだった。床は薔薇色の石が敷き詰められており、その上に敷かれた植物模様の厚い絨毯は、金の君の足音を完全に吸収する。部屋の隅には丸テーブルと椅子が置かれ、また窓辺には長椅子が置かれていた。
すっぽり被っていた砂色のフード付きマントを椅子の背もたれに掛けると、金の君はお気に入りの長椅子に、クッションを二つ三つ重ねて横たわった。動きにつれて、手首や足首に嵌めた金の輪が、しゃらりしゃりと音をたてる。
　クッションを抱きかかえながら、金の君は呟く。
「あそこでジルファに会うなんてねえ・・・まあ仕方ないわね」
　リルフィと一緒でなかったところを見るに、いまだ誘ってもいい返事は貰えないらしい。
誘っては断られるの、同じことを繰り返して、はやどれほどの年月がたったことか。気の長い話ねと半ばジルファに感心すらしてしまうのだけど。
　ジルファの問いに、金の君は答えを返さなかった。その態度の裏を、おそらく彼は読んでいる。そうして返ってきたはずの答えを確信しているのだろう。
「いやな男ね～空気を読んで黙ってなさいよ。というより、この場合はわたしの行動パターンの問題なのかしら？まったく、元々一つの存在っていやね、読まれやすいんだもの」
　瞳の奥に鋭い光を宿し、あの男は尋ねていた。
あなたは気付いているんですか・・・彼の目に宿る光、それが意味するものをと。
それは彼にもあなたにも・・・いいものになるとは限らないということを。
「わかっているわ。気付いていたわよとっくの昔にね。私があの子の新たな生の妨げとなってはならない。関わりあいにならないよう

に、二度と会うべきではなかったんでしょうね・・・まったくわたしとしたことが、下手を打ってしまったわ」
苦い言葉が零れおちる。迷子になった子どもが親のもとへ戻るのを見届け、二度と近づかなければよかったのだ・・・初めからそう思っていたはずなのに、己が取った行動はまるで反対で。
「ねえ、私こそが、何故関わってしまったかわからないのと言えば・・・貴方はどう思うかしら」
どのみち。金の君はため息をつく。
どのみち長いことではないのだから。彼の気が済むまで、他愛のないつきあいを続けてもいいんじゃないかと思うのだ・・・勿論。
彼が向ける、視線の意味にはけして気付かないふりをして。
そう長いことじゃない。彼が離れてゆくその時まで。彼が傷を癒すなにかを見つける、その時までは。
「貴方が心配するようなことは何一つ、起こらないわよ」
かつての己自身であり、いまでは分かたれた別人にむけ、金の君は囁いた。

扉をたたく音がして、金の君はもの思いから醒める。
「御方様、お待ちかねのタルトです。お茶はいつものでよろしいですか？」
トレイにタルトと湯気の立つカップを載せて、チェスミーが入ってくる。丸テーブルにそれらを置くやいなや、金の君は長椅子から体を起こした。
「ええもちろんよ。まあなんて美味しそう。さすがシュエねっ」
「シュエも御方様に褒められて嬉しいと言っておりました。それと、今度またこっそり出かけられた暁には、もう二度とお菓子は作らない、ともね」
金の君はフォークの先にさしたタルトを口に運びかけ、渋い顔をした。

「・・・食べてるときにそんな話はしないでちょうだい。せっかくのお菓子が台無しになるじゃないのっ」
あらそれは失礼いたしましたと、澄ました顔でチェスミーは答えた。

気付いていたわ、あの子が私に向ける、視線の意味なんて。
でもねえ・・・私がそれに、気付くわけには、いかないのよ。わかってるわ。だから。

わたしは、なにも知らないふりをして、笑う。

プレゼント

「プレゼントなら絶対これよ！」

色あでやかな夜の蝶も、昼間であれば長い髪を結いもせず背中に流し、身につける衣装も簡素なものだ。
とはいえその体から匂い立つような艶やかさは隠しようもなく、道行く人の視線を浚っていた。彼女は色とりどりの布や端切れ、袋物が並ぶ店先に立ち、店番と思しき青年と何やら話をしていた。
あのひとは・・・確か清華楼のお姐さんだわね。あいつってば、この間までは違うお姐さんとつきあっていなかったかしら。
ティナは三軒ほど離れた違う店先の柱の陰から、彼らの様子をうかがう。
別に遠慮しなければならない理由なんてないけど、わざわざあそこに割って入るほどの必要性は感じなかった。それにお姐さんから、まるで子供扱いをするかのような目で見られるのも御免だった。あのお姐さんがたは、自分と彼の関係を誤解しているんじゃないかと思う。以前違うお姐さんから言われた言葉を思い出し、ティナはむうっと眉を寄せた。
視線の先、お姐さんの用事は済んだらしく、紅のひかれてない唇に笑みが浮かんでいる。白い手を青年に伸ばし、額にかかる髪の毛をはらいのけ・・・露わになった額にかるく唇を落として、また今度というように手を振って歩き去る。姿勢のいい凛とした歩き姿は、ティナですら視線を奪われるものだった。
まったく、店先で何をやっているんだかとティナは思いながら、自分の用件を済ませるべく、青年の前に立つ。
「いらっしゃい・・・と、あれティナか」
さきほどお姐さんに向けていた笑みのかけらも見せず、何の用だ

と言わんばかりの青年に、ティナは口の端を引きつらせた。付き合いのながい・・・いわば幼馴染の自分にとって、彼のこの態度は悲しいかな慣れている。
ただ、慣れているからといって、怒りが湧かないかというと、そうではない。ぽこぽこ湯気をたてる薬缶のように怒る自分をしり目に、彼はどこ吹く風としているから、ますます彼女の怒りは増す。
いけない、今日は怒らないと決めたじゃない。冷静に冷静に。ティナはふふふと低く笑いながら、右手で左手を包み込むように握りしめる。
「ティナ？どうかしたのか、ヘンな物でも食ったのか？」
普段ならここいらで喚いているはずのティナが、黙っているものだから彼は怪訝に思ったのだろう。
まことに失礼な男だとティナは思う。確かに顔は整っていて、ゆるく波打つ金の髪も、まじりけのない蒼い瞳も人目を引きつけるに十分だろう。ただ、自分に言わせればこの男はただの性悪だ。
いささか気を取り直し、彼の目の前に手のひらをつきつける。
「なんだよいきなり」
「これが見えない？」
「はあ？・・・・って、お前自分で指輪買ったのかよ。寂しい奴だな・・・っいて、何するんだっ」
「何言ってんのよお馬鹿っ。こ、れ、は、婚約指輪よっ！」
はあ？殴られた頭をさすりながら、青い瞳を丸くして彼が間の抜けた声をあげる。
ティナは腰に手をあて、ちょぴりその小ささを気にしている胸をそらして、高らかに答えた。
「あたし、めでたくこのたび、婚約いたしましたっ。で、これは彼がくれたものなのよっ」
銀の指輪だ。色石は小さく三つが横並びに嵌まっている。
君の瞳の色に似ているからと、彼が選んだ石の色は明るい緑。
ぽかんと目も口もまるくした彼の姿を、お姐さんがたに見せてや

りたいものだとティナはこっそり思った。
こんな間抜け面、お姐さんがたは見たことがないに違いない。優越感などちっとも湧いてこないけれど。
「・・・なんと、物好きもいたもんだ・・・」
ティナは問答無用で、渾身の力で金の頭を殴りつけた。

「まったく、あの男はあああ」
自室のベッドに寝転んで、ティナは枕に八つ当たりをする。
「何が、お前を嫁にする物好きの顔みたいから連れて来いって？何様よもう！」
顔だけは綺麗な幼馴染は、口の端を歪めるようにして笑いながら、尊大に言い放ったのだ。
性格が悪いうえに、人の神経を逆なでする事ばかり言う。
罪のない枕をぎゅうっと抱きつぶし、ティナは指輪の嵌まった指を見た。これを見るとさっきまで感じていた怒りもふわりとほどける。そうだ、いつまでもあの幼馴染の事で腹を立てるのも莫迦らしい。
彼が照れたように顔を赤くして差し出したこの指輪を、負けないくらい真っ赤になったティナは受け取ったのだ。
そう遠くない日に、ティナは生まれ育ったこの街を出ていく。彼の住む街は遠いので、ここへもあまり帰って来れなくなるだろう。あの、人の気に障ることしか言わない幼馴染とも、顔を合せることもなくなるのだろう。そう思うと何だか変な感じがした。
「・・・あんなのでも、幼馴染だしね、うん」
少しくらい寂しく思っても、仕方ないわよねっ、あんな性悪でも。そう自分に言い聞かせる。
傍で口やかましく言う自分がいなくなれば、きっとあの男はお姐さんがたとやりたい放題するんだわ。
ああでも。

ティナはふと思った。
いくら自分が何のかんの言ったって、さてそれはどのくらいあの幼馴染に届いていただろう。
煩そうに自分の相手をしていた幼馴染。付き合いの長い分、ティナは他の人より彼をわかっていた。
誰にでも愛想がよく見えていたけど、その実“他人”の区別がついてないような、薄情な人間だった。
流石に顔と名前は認識されていたけど、彼にとって、自分はどういう位置にいたのかしらねとティナは思った。

『・・・あんたこんなとこで何してるの』
遊ぼうと誘いに行ったのに、幼馴染の男の子は何処にもいなくて、探しに出た。
色んな店が立ち並ぶ街角。路地の隅。そこにはいなかったから、少し離れた野原へ来た。
花が咲いている緑の野原で、膝を抱えて座っている小さな影を見つけた。
『何してるの』
花の色みたいな、大きな青い色の目を見開いて見上げてくる。けれど、すぐに困ったように目を伏せた。
『見つからないの』
『何が』
『おくりもの』
首を傾げる。幼馴染のこの話し方には慣れていたけど、全然何を言いたいのかがわからなかった。
『何がいいのかなあ・・・』
『ええと、つまりあんたは、誰かに贈り物をしたいの？』
『そう。お花はどうかなあって思ったんだけど・・・』
会うまでに枯れちゃうかもしれないから。

『あ、じゃあねえ、これはどう？』
てのひらを相手に見せた。正確に言うなら、指に嵌まっているものを。
『・・・指輪？』
『そ。ビーズで作ったの。綺麗でしょう？やっぱりプレゼントならこれよ！』
『喜んでくれるかなあ』
『絶対喜んでくれるって。教えてあげるから、一緒につくろ？あんた器用だから上手く出来るわよ』

「・・・そんな眠そうな顔してて、店番になるのかしら？」
ティナが軽く睨んでも、幼馴染は大あくびをひとつして、素知らぬ顔で笑う。
「ご心配なく。お前一人かよ。てっきり、お前を嫁にしようなんていう、物好き連れてきたのかと思ったのに」
「お生憎さま。彼はあんたになんて会わせないわよ。勿体ないわ」
「ふうん？別にさ、お前の婚約者を寝とろうとかって言うわけじゃないんだし」
「あんたねえ・・・いい加減にしないと、口で身を滅ぼすわよ」
「それこそご心配なく。で、何の用？」
まことにそっけない口調に、ティナはほとほと呆れた声をあげる。
「・・・お姐さんがたに向ける愛想の、十数分の一でも向けたらどうなの」
「おまえ、俺に愛想振りまかれたい？どうしてもってお願いされたら努力はするけどさ・・・」
「いい。あたしに愛想がいいあんたっての、想像しただけで気持ち悪いわ。本題に入りましょ。あのね、あたし今度結婚するわけじゃない？」

物好きのお陰でなという声は黙殺する。
「で。幼馴染として、何か祝おうという気はないの？・・・何よその、嫌そうな顔は」
「祝いを強要するわけ？何だか無粋だなあおい」
「お黙りなさい。あんたと幼馴染ってだけで被った被害のあれこれを、清算する機会をあげようって言ってるの。
特にこの数年、お姐さんがたに誤解されるわやっかまれるわ・・・あんたに身に覚えがないとは言わせないわよ」
肩をすくめ、幼馴染は仕方なさそうに言った。
「はいはい、わかりました。それでお前とも縁が切れるってなら、お安い御用です。・・・で、何か希望はあるのかよ」
ティナはにこりと笑った。
「あんたが作った布が欲しいわ」
青い花のような・・・美しい目を丸くして、言葉を無くした幼馴染の顔。それがまるきり幼い頃と同じで、ティナは思わず噴き出してしまった。
「何を言い出すのかと思ったら。お前も知ってるだろ、俺はもう作る方はやってないんだよ」
「いいじゃない。滅多にない幼馴染のおねだりなんだし、減るもんじゃないでしょ。それに、あたしはあんたが作る布が、とても綺麗だって知ってるのよ。だから欲しいの」
それであたしとの縁が切れるってなら、安いものでしょう？
わざとらしいほどにっこり笑ってやれば、金の髪をぐしゃぐしゃとかき回しながら、彼は根負けしたように呟いた。
「わかったよ、作ってやるよ・・・まったく、相変わらずとんでもない女だな」
「ふふ、快く引き受けてくれて嬉しいわ。じゃあ楽しみにしてるわよ」
苦い顔の幼馴染に背を向けて・・・ティナはふと立ち止まる。
自分の左手の薬指に嵌まる指輪。この間見た夢は・・・あれは幼い

頃の記憶だった。
「ねえ、あんたには、“指輪”を贈りたい誰かは居るの？」
「は？何を藪から棒に」
「あんたは覚えてないでしょうけど、いつだったか、ビーズの指輪、一緒に作ったじゃない。それは誰かにあげた？」
「そんなことあったか？」
「まあ、今は指輪じゃなくても、あんたが作った布でもあげれば、いちころじゃないかしらね」
「姐さんがたは、そんなものなくても俺に惚れてくれてるけどな」
「あんたは本気じゃないくせにね。それくらいわかるわよ。幼馴染としては、あんたが寂しい老後を送らなくても済むように、ちゃんと本気の相手を見つけるよう、忠告することくらいだけど」
茫然としたように、困惑したように自分を見上げる幼馴染に、ティナは微笑みながら言った。

「いつかあんたにも、“指輪”を贈るような誰かが、見つかるといいのにね」

『形が変になっちゃったよ』
『大丈夫だって！きれいに出来てるよ』
『ほんと？よろこんでくれるかな』
『大丈夫！ねえ、それあげに行くんでしょ、あたしもついて行ってあげようか？』
『いい、一人で行くもん。ついて来ないでよっ』

オクリモノ

「可愛らしい子ね」
息が整った頃、汗の浮いた引き締まった胸に頬を寄せて呟けば、怪訝そうな声が返ってきた。
「誰の話？」
猫を撫でるように、彼はゆったりとした手つきで髪の毛を梳いてくれる。
「昼間、店先で話していた子よ。幼馴染って言ってたわよね？」
ああ、あいつね・・・可愛らしい？
半ば本気で首をかしげている彼。髪を梳く手も止まってしまっている。
その様子がおかしくて、首をもたげて彼の裸の胸に肘をつく。
「あら、近くに居ると存外見えないものね？明るい緑の目が綺麗な子じゃないの。今まで気がつかなかったの」
「・・・そんなふうに思ったことはないけどなあ・・・突然何言い出すんだか」
ふふふと笑いながら、彼の唇の端に口づける。
「突然じゃないわよ。だってあの子と話すときだけなんですもの、あなたが表情変えるのって。驚いたり意地悪そうな顔したり、ね。わたしには・・・わたしたちには、澄ました顔しか見せないくせに」
だから、わたしは・・・わたしたちは、あの子にいじわるもしたし、妬きもしたのよ。あなたは少しも気がつかなかったんでしょうけど。
彼は青い瞳を何度も瞬きして、ため息のような声をこぼした。
「気が付かなかったな・・・別に、姐さんとあいつで態度変えてたつもりはないんだけどさ」
「ふふ、わたしたちだってわかってる。あなたは、あの子に恋愛感

情なんて持っていないって。それでもねえ・・・わたしたちには見せない顔を見せる。だから妬いたのよ」
　赤い唇を歪めて見せると、彼は信じられないと首を振った。
「あんな口やかましい女にねえ・・・とてもじゃないが信じられない。それに、姐さんがそんな裏事情を俺に言うのも、な」
　ええそうねと青い瞳を覗きこみながら小さく返す。この男が本気で自分に惚れているなど思ってはいない。
自分だけでなく、他の“夜の蝶”たちも同じこと。言葉遊びのような戯れを繰り返し、時に体を熱を絡み合わせても・・・それはどの女にもわかっていた。
　それでも、言わずにおれなかったのは。
「・・・あの子に、贈り物をするっていうじゃない」
「姐さんにも、確かちょいちょい贈り物をしてなかったか？あいつにやるようなモノより、もっといい奴をさ」
本気で首を傾げる彼に、それ以上は言わなかった。彼は贈り物として様々な物をくれた。綺麗な布や、装身具、花・・・それらは確かに嬉しかったけれど・・・あの子が彼にねだった、彼が作ったものは終ぞ贈られることはなかった。取り繕わない、“顔”さえ。
　それは望んでも得られないものだろうと諦めてしまえばよかったのだろうけど。
「まあ・・・これであいつと縁が切れると思えば、安いもんだ」
清々したように彼は言い、腕をひいた。豊満な白い胸が彼の胸の上で形を変え、唇が重なる。
　これで話は終わりとばかりに、息も出来ないほどの口づけが続く。
　彼の片手は、白い胸をやわやわと揉みしだいている。そしてもう片方の手は下半身に伸び、先ほどの熱に濡れた箇所をかき回している。十分に潤っているそこからは、先ほどの残滓がこぼれ出していた。
「・・・っ、やぁ」
「いや？なら姐さんやめるけど」

「っ、やめない、で」
もどかしい触れかたに身をくねらせていると、彼はにやっと笑った。酷薄そうな笑い方、それこそは幼馴染のあの子には見せないものだろう。わたしが、わたしたちが得られるのは、他にはこのひとときの熱だけ。
それしかくれないなんて酷い男と詰ればいいのか。
体を反転させられて、やわらかい寝具に仰向けになる。膝の後ろを掴まれ、大きく割り拡げられた。既に下半身は放たれた熱でどろどろに汚れている。新たな熱を期待するそこは、空気に晒されひくひくと震えていた。
彼は物欲しげに蠢くそこには手を触れず、仰向けになってもつんと上を向く白い乳房を撫でさすった。
こねるように、潰すように・・・または乳首を摘みあげるようにするたびに、身の内をはしる刺激に耐え切れず喘ぎ声が零れる。
「やっ、意地悪、しないでっ」
「なら、どこに何が欲しいか言って？」
酷い男ねと快楽に染まった頭の隅で詰る。欲しがるのはわたし・・・わたしたちばかり。
あなたは私たちを欲しがらない。
それなのに、自分を欲しがれという。
それでも・・・わたしたちはあなたに従うのよ。
「ここに・・・あなたを頂戴・・・っ」
彼の手を取り、自ら濡れる場所へ導けば、彼はにいっと笑った。
「お望み通りに」
体の中に潜り込む熱、そして弾ける熱に、眩暈がしそうな幸せと、同じくらいの寂しさを感じた。
私が得られるモノはこの熱だけ。でも、あなたは何を得るの？
何を欲しいと思うの？

何かを欲しいと・・・思うのかしら。

熱に浮かされながら・・・いつか彼が、心の底から何かを欲しがるようになればいいのにと願った。

たとえ、望まれるのが、わたしでなくても。

きざはし

「お～い、ティナいるか？」
妹の名を呼ぶ声に、ジュールが玄関扉を開けてみれば、そこには脇に包みを抱えた幼馴染が立っていた。
こいつが家に訪ねてくるなんて、珍しいなと思いながら妹の不在を告げる。妹は結婚式の打ち合わせで、婚約者のいる街へ出かけていたのだった。
「ティナなら居ないけど・・・何か用か？」
ふうんと花の名前を持つ、冴えた金の髪の幼馴染は鼻を鳴らした。
「居ないならいいや。これ、ティナに渡しておいてくれ。頼まれたものだって言えばわかる」
ジュールの返事を聞こうともせず、幼馴染は包みを押しつけてくるから、ちょっと待てよと慌てて押しとどめた。
「ちょっと待てよ、ティナがお前に頼んだものだって？あいつ何頼んだんだよ」
妹とこの幼馴染は、長年喧嘩友達のような間柄ではあった。幼馴染とはいえ、普段ろくに口も利かない自分とは違い、親しい関係であると言えよう。けれど、頼みごとをするような間柄とは思えなかったし、ましてこの幼馴染が、妹の頼みごとを聞くとは思えなかったのだ。・・・夜の蝶たちの願いなら、二つ返事で叶えるような男であるが。
ジュールとしては当然の疑問だったが、幼馴染は答える気はないようで、強引にジュールの手の中に包みを押しこみ、背を向けて立ち去ろうとした。
「ちょっと、おいっ・・・うわっ」
幼馴染の背に怒鳴ったジュールだったが、包みを落としかけて思わず声を上げた。すると。
包み自体は軽かったのだが、包み方が甘かったようで、中身が零れ

おちてきた。
　露わになった中身に、ジュールは目を丸くする。それは、花嫁が衣装の上から身につける・・・様々な吉祥紋様が織り込まれた、色目も鮮やかな、一枚の布であったから。
「これ・・・を、ティナに？」
「頼まれたからな。“これであたしと縁が切れるなら、安いもんでしょう”だってさ。ほんと、あの女を嫁にしようなんて物好きの顔が見たいもんだ」
「お前が、これを作ったのか？」
「そうさ。俺はもう作ってないって言ったのにな。だから、出来についちゃ保障しないって言っておいてくれ」
　肩をすくめて答える幼馴染の声を、ジュールは碌に聞いていなかった。
ジュールの家も、幼馴染の家と同じように職人の家だった。幼馴染の家が染織をしているのに対し、ジュールの家はガラス細工を扱っている。その違いはあるが、モノについて見る目はあるつもりだった。
　その自分の目から見て、この布は“出来が保証できない”など言わしめるものでは、ない。
　どこにだしても、称賛を得られるに違いない、そんな出来のものだった。思わず口に出していた。
「とてもいい出来じゃないか。ティナもきっと喜ぶだろう」
　幼馴染は口の端を釣り上げて笑った。
「本当にそう思うか？」
「ああ・・・どうしてそんなことを聞くんだ？」
「いや・・・」
　幼馴染は肩をすくめて答えた。
「お前、俺の事はあまり好きじゃないだろう？なのに何でそんなこと言うんだろうかなってさ」
　ジュールは返事に困った。確かにこの幼馴染をあまり好いていな

いのは本当だった。幼い頃からのつきあいとはいえ、馬が合わないというか・・・成長するにつれ言葉を交わすこともなくなっていった。ティナはよく付き合えるものだとも思っていた。ただ、その感情は抜きに、今目にしているものは素晴らしいものだと・・・それははっきり言える。

「俺がお前を好きでも嫌いでもさ、そんな事は関係なく、これは綺麗だと思うよ。・・・また作ればいいのに」

ジュールは本心からそう言った。それほど素晴らしい出来のものだったから。幼馴染は驚いたように青い目を丸くしていたが、すぐにやりと人を小莫迦にしたような笑みを浮かべた。

「そうだな、姐さん達からお暇が出たら、考えてもいいや。じゃあな、それティナに渡しておいてくれ」

ティナと、ティナを嫁にする物好きにもよろしくな。大股に去ってゆく背中に、ジュールは叫んだ。

「おい！よかったらお前もティナの式に来いよ！ティナの旦那の顔が見れるぞ！」

幼馴染は振り返りも返事もせず、ただひらひらと手を振ったのだった。

「まったく・・・」

ジュールは布を丁寧にたたみ、もとあったように包んでおいた。ティナがこれを見れば、とても喜ぶだろう。

花嫁衣装を身にまとったティナを、さらに美しく彩るものになるだろう。それだけのものを作れるのに。

あの幼馴染は、もう作ろうとしないのだ。

だから俺は、お前が好きじゃないんだとジュールは小さく呟いたのだった。

花嫁のヴェール

ティナが呼び掛けたその人は、その名の通り、綺麗なアイリス・ブルーの瞳をしていた。

ティナとの結婚式の日は、よく晴れて気持ちいい風が吹いている日だった。

ティナは僕と結婚した後は、僕の居る街で暮らすのだけど、そこはティナの住んでいた街からはとても遠い。結婚式をあげるにしても、僕の住む街であげると友達や知り合いに来てもらうことは難しいわとティナは困った顔をした。

だから僕や僕の親族は、色々相談をして、式は彼女の住む街で挙げ、もう一度お披露目だけを僕の住む街でしようということにしたのだ。

流石に式には僕の身内は参列しなければならないから、ティナの住む街へはるばるやってきた。

とはいえ、半ば物見遊山の旅行気分。僕たちの住む街よりも、色んなものがある街だから、親族たちはこの変則的な式にも了解したのだと思う。

ティナを喜ばせる事が出来たので、僕としては構わないのだけど。

花嫁衣装を身につけたティナは、文句なしに綺麗だった。いつもは元気に走り回っている印象が強く、綺麗というよりは可愛らしいという方がぴったりな彼女だけど、白を基調とした衣装を身にまとい、頭から黄色と緑の吉祥紋様が織り込まれた、光沢のある布を被った彼女は、綺麗と言う方がしっくりくる。

神様の前で永遠の誓いをし、ティナの両親や兄弟、僕の親族たち、そしてこの街に住む多くの人から僕たちは祝福を受けた。

ティナは彼女の家が営むガラス工房、その製品を売る店の看板娘で、僕はその店に製品を買いにきて彼女と知り合いになった。

彼女を好きな奴はかなり多くて、競争率の高さに内心びくびくしながら僕は彼女に告白したのだった。
意外にも彼女は自分がもてているなんて知らなくて、母さんからもう少し大人しくしてないと、恋人も出来ないわよなんて言われてたのよと笑っていた。してみると勇気を振り絞って告白した自分は幸運だったのだろう。
そしてあの時勇気をだした自分をこっそり褒めてもいいんじゃないかと思う。
教会から彼女の家に帰る道すがら、花嫁衣装を身につけた彼女を見て、ため息をついている男どもがちらほら見える。それを凝視しないのがせめてもの情けだろうと思い、僕はひたすら前と彼女の方を見て歩いていた。
彼女の街では、教会で式をあげた後、大通りを練り歩いてから家に戻るのだという。本来は嫁いだ相手の家に戻るらしいが、今回は変則的に彼女の家に戻ることにしていた。大通りを練り歩くのは花嫁もしくは花婿の顔見せという面もあり、また式に参列できない人がお祝いを言う機会をあげるという面もあるのだろう。
まるで花が降るように、沢山のお祝いの言葉が投げられる。それらに笑顔で答えながら、僕たちは歩いていった。
その時。ティナがあら、と小さく呟いたかと思うと、大きく手を振りながら大きな声で呼びかけた。

「アイリス〜っ、ほら見てよ、この人がわたしの旦那さんよっ」
アイリス、と呼びかけられたのは、僕と年が同じくらいの金の髪、青い瞳の男だった。大通りから少し離れた所で、僕たちを眺めていた様子の彼は、ティナが大声で呼びとめなければ、背を向けている所だったのだろう。
顔をしかめてため息をつき、仕方なさそうに近寄ってくる。近づくと彼が驚くほど端正な顔立ちをしていることがわかった。
「ティナ、アイリスじゃなくてイリス。まったく大勢の前で呼びや

がって」
「あんたの名前がアイリスだってこと、この街の人なら知ってるわよ、呼び名少し変えたって今さらでしょ」
「ふん・・・ところで、こいつがお前を嫁にしようって物好きか。こいつでほんといいのかよ？じゃじゃ馬だし口より手が先に出るし。考え直すなら今のうちだぞ」
「アンタ何言ってるのよっ。彼が目丸くしてるじゃないのっ。ああっ、こんなこと言いたいんじゃなくてっ」
ティナはふるふると頭を振って、こほりと咳払いをした。そして。頭に被っていた布に触れながら言った。
「あのね、あたしあんたにお礼が言いたかったのよ。こんな綺麗なもの作ってくれてありがとうって。ほんと綺麗で、あたしとても嬉しかったの」
アイリスと呼ばれた彼は、ふんと鼻を鳴らす。
「まあ、馬子にも衣装って奴だな。せいぜいその物好きに捨てられないよう大事にしろよ」
「アイリスっ、あんたはもう～っ」
じゃあなと彼は片手をあげ、くるりと背中を向けて歩き出す。一度も振り返ることなく路地の向こうへと姿を消した。

まったく、と些か憤慨した様子で歩くティナに、さっきのは誰だいと僕は問いかけた。
ティナは、彼は自分の幼馴染なのと答えた。そして布に触れながら、これを作ってくれたのも彼なの、と。
彼の家は染織を生業としていて、その名は僕の住む街でも知られている工房だった。
僕は改めて、彼女が被る布を見つめる。黄色と緑が主体の、繊細な吉祥紋様が織り込まれた布。
それを見ていると、アイリスと呼ばれた彼が口に出さない言葉が読み取れる気がした。

彼女を引き立て、より美しく見せるその布に。

とても綺麗な布だね、よかったねと僕が言うと、彼女はええ、と輝くような笑顔を返してくれた。

彼女のために作られた布。
そこに込められたものが、アイリス・ブルーの瞳を持つ彼からの“祝い言葉”だったのだろう。
ティナは正しくそれを読み取ったのだ。
僕たちは大通りを歩きながら、様々な祝福の言葉を受け続けたのだった。

指先の伝言

「ねえ・・・その指、どうしたの？」

肌を辿る彼の指先が、青く染まっていた。彼の家が染織を生業としているのは知っている。彼女が身にまとう衣装や手にする布の幾つかが、彼の家で作られたものであることも知っていた。この街や、遠い街にまで名が通る店であることも。

けれど、彼自身が作る方に携わっているなど、聞いたことがなかった。

彼は彼女の肌を辿りながら、気のない返事を返す。

「ねえってば」

彼は褥に横たわり、彼女を後ろから抱きかかえていた。ほどよく筋肉の付いた腕が、熱の名残で震える胸や腹を宥めるように摩ってゆく。・・・その青く染まった指先を手に取り、彼女は再び尋ねた。

「青く染まっているけど・・・これって、染料なの？」

まあねと彼は低く呟いた。彼女の首筋に顔を埋めたまま話すので、吐息がかかりなんともくすぐったかった。

「あら、あなた作る方はしないって、前に言ってなかった？」

店番をする彼が勧める布は、どれも彼女に合うものばかりだった。いや、正確に言うなら、彼女たちをそれぞれ引き立てるものばかりを選んでくれた。彼はそういう確かな目を持っていて、彼女たちは季節が巡るたび、新たな装いや意匠について彼に相談していたものだ。

一度、彼自身の意匠で作らないのかと尋ねたことがある。そのとき彼は、自分は作る方には向いていない、こうして店先でお姐さんがたと話をする方がよほど楽しいと笑って答えた。

それなのに。

まあ、ちょっとした気まぐれだよ。試したいことがあってさと彼

は答える。そうなの、と彼女は吐息とともに答えた。その理由を問うても、おそらく彼は答えてはくれまい。だから彼女は彼の手を取り、いまだ熱で濡れる下肢に導いた。

「朝まではまだ時間があるわ・・・いい？」

もちろん、と彼は笑った。

彼の青く染まった指先が体の奥へ埋まるのを感じて目を閉じた。

咲く花と

「あら、久しぶりね、元気だった？」
にこりと笑いかければ、茫然と目を見開いて彼はわたしを見た。

「驚いた、まさか本当にあんたに会えるなんて思わなかった」
人が大勢行きかう市場の、すこし奥まった場所にある石造りのベンチに。少し離れて腰かけ、花の名前をもつ青年は大きく息を吐いた。金糸の髪を持つ妙齢の女性は、つんと唇を尖らせて答える。
「あら、半分は望んでいなかったの？・・・あなたの呼ぶ声が聞こえたから来たのに」
お呼びじゃないなら帰りましょうかと答えると、青年は慌てた様子で腰を浮かせる。
「いや、そうじゃなくて。会いたかったのは本当だけど、ほんとに会えるとは思わなかったんだ。最後に会ってからもう何年も経ってるし・・・」
「そうね。あなたはすっかり大人になったし。もうわたしのことなんて、とっくに忘れてると思っていたわ」
「忘れてないよ。あんたの名前だって、ちゃんと覚えている」
即座に返ってきた返事に、まあ、と瞳を丸くする女性に、彼は答えた。
「ヒース、だって教えてくれたろう？名前。男の名前じゃないかって俺が言ったら、荒野に咲く花の名前だって言った。その花を見せてくれるとも。結局その花は見られなかったけど」
俺はまだその花を見てはない。知らないままなんだけど。面影はそのままに、しかし少年からすっかり青年へと成長した彼は、もう彼女が見上げるほどの美丈夫となっていた。それだけの時間が流れ

ていたのに。
「そうね・・・そう、言ったわね。本当によく覚えていたのね」
アイリス、と吐息交じりにヒースと呼ばれた女性は、彼の名前を呼んだ。
彼は・・・アイリスは、青い瞳を嬉しそうに細めた。

それから何度も市場のいつもの場所で会った。以前そうだったように、特に次の約束はしなかったけれど、会えればたいてい他愛のない話をする。してもしなくてもいいような、他愛のない話を。
俺の呼ぶ声が聞こえたって、本当かいと彼は笑っていたけれど、それは本当の事。
岸に打ち寄せる波のように・・・彼の声が届いたのだ。その声に自分は心底驚いたものだ。子どもの時間は経つのがとても早い。会わないうちに自分の事など忘れ去ったと・・・その方がいいのだと思っていた。
最後に彼に会ったのはいつだったか。
名前を聞かれ、自分は咄嗟に荒野の花の名前を答えたのだ。その名前を彼は覚えていて・・・その名前で自分を呼ぶ。
彼のためには、もう会うべきではないと思いながら、結局は会い続けている自分の行動を、とても不思議に思っていた。そう長い間のことではないからと、誰に言うでもない言い訳じみたことを思いながら、彼女に仕える者たちの目を掠めて出かけていた。そんなある日、彼は言った。
「違う場所で会いたいんだけど、いいか」
しばらく考えたあと、頷いた。
「いいわ。どこへ行けばいいのかしら」
彼はある宿屋の名前を口にする。
「隣町にあるんだ。もしよかったら、来てほしい」
答えを待つ間、彼は期待と不安が入り混じった表情で彼女を見つ

めた。彼を知る者がこの光景を見たら、驚いたに違いない。何せ彼は約束をねだられることはあっても、自分から約束を取り付けることなど、今までしたことがなかったから。
「あら、あなたみたいな綺麗な若い子からのお誘いは魅力的だけれど、知ってるでしょう？わたしはあなたよりもかなり年上だわよ？そういう意味でのお誘いならお断りするわ」
ふふと笑み交じりに断れば、彼は慌てたように首を振った。
「いや、ええと、見てほしいものもあるから、それにあそこは料理もうまいし、だから」
しどろもどろの様子に、彼女の笑みが深まる。彼も今では彼女が治める世界の住人で。だから大事にしたいのも当然なのだ。出来る事なら望みをかなえてやりたいと思うくらいには。
いつ行ったらいいのかしらと尋ねると、彼は目を丸くして、それからとても嬉しそうに笑った。

広がる色彩に目を奪われる。まるでこの部屋の中に沢山の花々を呼び込んだかのようだ。柔らかな象牙色の野に、青い花や金の花が咲いている。
思わず感嘆のため息をこぼすと、彼は嬉しそうに笑った。
「どう？気に入った？」
「ええ、とても綺麗な布ね。染めも織も見事だこと・・・縁は金糸で縫いとりをしているのかしら。細部まで手を抜かない仕上がりね」
わたしに見せたかったものとはこれかしらと彼を・・・アイリスを見あげると、彼はそうと頷いた。
約束した宿屋にやってきて、彼の名前を告げると店の者に二階の部屋に通された。すでにアイリスは来ており、彼女の顔をみていくらか安心したような表情を浮かべた。それに気づかぬふりで、お待たせしちゃったかしらと彼の向かいに座る。いいやそんなことはないさと彼は答え、彼女を案内してきた者に、料理を運んでくれるよ

う頼んでいた。この辺りでは珍しい設えの店だった。この部屋には椅子はなく、草の匂いのするマットへ直に座るようになっているらしい。塗りのテーブルの脚は短く、そのちかくに刺繍の施されたクッションが置いてある。

その一つを引き寄せて、楽なように座りなおす。飲み物は何にすると彼が尋ねたので、少し考えて甘口の酒を頼んだ。どうやら話とやらは料理の後にするらしいと思い、ならばと酒と料理を楽しむことにした。なるほど上手い酒と料理にいい気分になったところへ、彼が取り出したもの。それは。

美しい、一枚の布だった。

布に指を滑らせながら尋ねた。

「これはどうしたのかしら」

「俺が作ったんだ。あんたにやろうと思って」

「ああ・・・そういえば、あなたのお家って染織してたわね。それにしてもこんな見事なもの、貰えないわよ。貰う理由がないわ」

「俺の方に理由はあるさ。・・・ティナが・・・ああ、ティナって覚えてるかな」

「ええ、たしか貴方の幼馴染でしょう？何度も話に出てきてたわね」

「この間物好きに貰われていったんだけどさ。で、結婚祝いに俺の作った布が欲しいって言うから、作ってやったんだけど。そいつが言ったんだよ。“あんたの作るものはとても綺麗なんだから、贈り物にすればいっぺんに相手は好きになってくれる”って。だからこれはあんたにやる」

「その“だから”の繋がりがおかしいわよ。これはもっと可愛らしい娘さんにあげなさいよ。貴方のまわりには、貴方に熱をあげてる可愛い子が沢山いるんじゃないの？」

「俺は何とも思わないのに？何を言われても、俺には何にも響かないんだ。したいことも無いし欲しいものも無い。俺はそういうもの

なんだってずっと思ってたよ。でもティナに言われて思い出した。俺にも贈り物をしたい誰かが居たって」
「・・・あなたはわたしを何だと思う？ヒト？それともアヤカシかしら？」
「何だっていいよ。傍にいたいし、そばにいてほしい。贈り物をしたいのもあんただけだ。俺がどれほど嬉しかったか、あんたにはわかる？ヒトでもモノでも・・・言葉でも、俺の中には何一つ響かないけど、あんたと居る時だけは違うんだ。だから、あんたが何者でも構わない」
「・・・そこまで熱烈に口説かれちゃ、ほだされちゃいそうだわ」
「ほだされてくれよ・・・俺を、好きになって？」
答えるかわりに、彼女は白い腕を彼に伸ばしたのだった。

「ああ、やっぱり思ったとおり綺麗だ」
青い花、金の花が咲き乱れる布を纏う彼女を見て、彼は嬉しそうに笑う。象牙色の地に咲く花と、幾何学文様の緑の葉。縁は金糸で縫いとりがされている。一見しろく見える象牙の生地じたいにも精緻な紋様が織り出されており、近くで見るといっそう見事な布であった。
「この青い花はアイリスかしら」
「そう。ヒースの花はわからなくてさ。なんとなくあんたのイメージって金色だったから、金色の花を縫いとりしたんだ。ヒースってどんな花なんだっけ？」
「そうね・・・荒野に咲く、ちいさな薄紅色の花よ。普通の野原に咲いていたら、地味で目立たないような」
「今度、見せてくれよ」
「ええ、花が咲くころにね・・・見に行きましょうか」
腕の中に彼女を抱いて、彼はいっそう嬉しそうに笑ったのだった。

こうなるはずじゃ、なかったんだけど。
小さな呟きを聞くものは誰もいない。彼はいまだ夢の中、目覚める気配はなかった。囲うように腕の中に閉じ込められては、抜け出すことも叶わない。
己の行動が正しかったとは思わない。“冷静に”考えれば、彼には二度と会わないことが一番正しかったのだと・・・思うから。
けれど。
「間違っていたとも、思えないのよね・・・」
ちいさくため息をこぼし、目を閉じる。

「あなたが望む限り、そばに居るわ」
それは、彼が聞いているはずもない、彼女からの答えだった。

雲の行方

「ずいぶんと可愛らしいおままごとだったね」

「・・・いやあねジルファ、女性の部屋に勝手に入るものではなくってよ。それもこんな夜更けに」

金の君が己の宮、その居間へ足を踏み入れた時、そこには既に先客がいた。腕組みをして彫像のように立つ姿は、彼女にとって見慣れた人物であったが、先触れや案内もなく、ましてこのような時刻に訪れた事など、今まで一度もないことだった。

明かりと言えば空にかかる月のみ、その光が朧に辺りを照らす中、彼は椅子に腰かけもせず、窓の外を眺めていたようだった。

「それは失礼。無礼は承知の上ですよ。ただどうしても至急お話しなければならない事があったものでね」

いつもの飄々とした様子のまま、芝居がかった仕草でジルファは片手を肩にあて、かるく頭を下げる。ただしその目に笑みの欠片はない。月の光を弾く瞳は、水の底のように冷たかった。

「通信球では駄目な話なの？」

「ええ。ぜひとも、直接お話ししなければならない事でして」

そう、とため息ともあきらめともつかない吐息をこぼし、金の君は豊かな金糸の髪を指で撫でつけた。被っていたフード付きマントを椅子の背もたれに掛けると、深夜の来訪者を睨む。

「悪いけれど、手短にお願いできるかしらね。そこへ掛けてちょうだい」

金の君は長椅子の傍らに設えられた、ラグやクッションを敷き詰めた場所を指した。テーブルについて差し向かいで話す気分ではなかったし、かといって長椅子で隣り合って話す雰囲気ではなかった

からだ。
そう言い置いて、彼女は飾り棚から手のひらに入るほどの小さなグラスを二つ取り出した。そこへ深紫色の液体を満たすと、グラスを直接手に持ち戻ってきた。
「どうぞ。たいして楽しそうな話じゃなさそうね。お酒でも呑ませてちょうだい」
金の君はクッションの一つに座ると、早速グラスに口をつける。ジルファはグラスの中身を目を細めて見つめ、おもむろに飲みほした。立てた片膝を両腕で抱え、その上に顎を乗せた姿勢で金の君を見つめる。
「ええ、残念ながら、楽しい話とは言い難いですね。このような話をあなたとしなければならないとは、まことに残念ですよ」
「あなたはさて、何を言いたいのかしらね。わたしにはわからないんだけど。手短にと言ったはずよ」
「あなたは既に、私の言いたいことはおわかりのはずだ。・・・ならば言いましょう。あなたは何処に行っていました？何をしていましたか？」
「答える必要は感じないわね」
「彼の所へ行っていたんでしょう。かつての銀の界の王子のもとへ」
ジルファの言葉が終るか終らないかのうちに、彼の手が伸びてきて、金の君はラグの上に引き倒された。グラスが手から落ち、深紫の液体が敷き布に染みを作る。細い両手首を大きな手で掴まれ、金の君は真上から覗きこむ男を睨みつけた。
「何の真似かしら。この手を離しなさい。いくらあなたでも、容赦しないわよ」
「無礼は重々承知と申し上げましたよ。御方様、これは一体何でしょうか。ここにも、ああ、ここにもついてますね。なんとたくさん痕を残されたことだ」
ジルファの指先が金の君の肌の上を滑る。点々と散る紅い痕を辿って。白い首筋や、喉元、綺麗に浮き出た鎖骨や、胸元。ジルファ

の指がそれらに触れても、金の君は瞳につよい光をたたえたまま、微動だにしなかった。
「あなたはわかっていたはずだ。彼のこの度の生に、関わるべきでないと。ただでさえ理を歪めて転生した魂を持つ彼には・・・これ以上の不要な刺激を与えるべきではないと。わかっていながら、あなたは何故彼に関わったのです？そして・・・何故」
理解に苦しむというように、ジルファは声を絞り出した。
「何故、彼に肌を許したのですか」

「わかっているなら、聞かないでちょうだい」
金の君は気だるげにクッションに体を預け、金糸の髪を持てあそぶ男から顔を背けた。
「いいえ。聞かずにはおれませんよ。確かに彼の魂には、理を歪めたがための、傷がついているでしょう。それをあなたが哀れに思う気持ちもわからないではありません。けれど、それはあなたの自己満足でしかないのではありませんか？“彼”に惨い目にあわされた、かつての銀の界の命は、いまだ転生の道筋の途上にありましょう。“彼”はそれら全てを忘れて、新たな生を得ました。そして、望むものを手にしようとしている。“彼”によって命を失くしたものから見れば、これはあまりにも不公平な在りようではありませんか？」
金の君は紅い唇でぽつりと呟く。
「不公平ね・・・いいえ、あなたにそう見えようとも、理は案外公平なものよ？分かたれた身になって久しいから、忘れたの？彼が新たな生で、望むものを手にしてるですって？」
「ええ。あなたの心を得ているではありませんか。そして健康な体や、優しい家族も」
「それすら、望みや欲がなければ、無味乾燥なものね・・・意味を

見いだせないものね。あの銀の世界の、あの酷い状況の中でさえ、人は色んな望みを持っていたわね。“彼”はこの平穏な世界に転生がかなった。己の才覚しだいでは、どんな望みも叶ったでしょうね。でも・・・彼は今まで、何かを欲しいと思ったことがなかったそうよ」

「なんですと・・・・？」

「嬉しいとか悲しいとか、よくわからないのですって。言ってたわ。毎年家族から、誕生日に欲しいものを聞かれて、特に欲しいものなんて何もないから、何でもいいって答えたら、ヘンな顔されたって。わからないのよ、何かを望むっていうことが。それこそが“彼”についた傷であり、かつての“彼”に対する報いね、きっと」

望みもない生に、どんな意味があるんでしょうね。わたしならそんな生は御免だわ。そして、と金の君は言葉を続ける。

「彼の時間は残り少ない。あなた、気付いていなかったの？彼のこの界での生は、あとわずかで終わるわ。望みない、短い生というのが、彼に与えられた報いだったのでしょうね。本当に理というのは、案外公平に出来ていること」

驚きに目を瞠るジルファに、ふと金の君は笑いかける。

「理というのは・・・本当に断ち切ったつもりでも、どこかしら繋がりを残しているものね。わたしとどんな関わりがあったとしても、彼は遠からずこの界を去るわ。あなたが心配するような事はなにもない」

「・・・彼がかつての行いに相応しい罰を理から受けているのはわかりました。私が理解出来ないのは、あなたの振る舞いです。ここまで関わる必要があったとは思えません」

「なら・・・あなたならどうする？自分の望みは、あなたの傍に居る事だけだって・・・こんなことを思うのが初めてなんだって言われたら」

ジルファは答えられなかった。金の君は答えを期待してはおらず、遠い目をして呟いた。

「伸ばされた手を振り払うのは難しいわ。そうね、“君”ならばそれでも、その手を取るべきではなかったんでしょう。でもわたしには、それは出来なかった。わたし以外に、何か別の望みが生まれるまで、彼の命が尽きる時まで、関わっていてもいいかなって思ったのよ。何も望まない生なんて悲しすぎるから」

そうですか、とジルファの口から、諦めに似たため息が零れた。

「御方様のお心はわかりましたよ。貴方が取った行動については、一応納得はしました。しかし、わたしには新しい不安を感じています」

「あら、何かしらね」

「彼の時間は、残り少ないと言いましたね。その時が来た時、あなたは彼を見送れるんですか？」

かつて銀の界の王が行ったように・・・理を歪めてしまいませんかとジルファは尋ねた。それだけの強大な力を“君”は持っている。金の君は口元に笑みをたたえ、まっすぐにジルファを見返した。

「誰に言っているのかしら。その時が来れば、わたしは理が示すままに、彼を見送ることでしょう」

「そう願っていますよ」

ジルファは金の君の髪に口づけると、身軽く立ちあがる。気の早い鳥たちがさえずりはじめ、東の空は徐々に明るくなっている。月は西の空に傾いていた。

片手を胸にあて、おどけたふうにジルファは腰を折る。

「それではそろそろ失礼します。数々の無礼な振る舞い、どうかお許し下さい」

明るくなり始めた空を、金の君は眺めていた。夜の闇色が濃い藍色になり、それがどんどん青く淡く透き通ってゆくのを。そうしてほんのひととき、彼の瞳の色に似た色となるのを、ただ見ていた。

鳥の囀り、柔らかな朝の光。それらを感じながら、金の君は瞳を閉じたのだった。

やさしい死神。

はやく早く行かなくちゃ。追いつかれてしまうよ。
早く、もっと速く、もっと遠くへ。

何処へ？
誰に、追いつかれるの？

「追いついてしまったよ」
そう言って笑う“彼”の顔は、彼女がよく知る彼の顔とよく似ていた。しかし、彼と大きく違うのは、“彼”が冷たい色の瞳を、とても哀しそうに揺らしていたからだった。望んでも叶わなかったと思い知らされ、どうせ叶わないならばと、初めから望むこと自体を放棄してしまった目の色。
それで彼女は悟った。歪めた理の代償が、彼に訪れていることを。

体を起こすと室内はまだ暗く、夜明けには遠いことが窺えた。
「さっきのは・・・夢、じゃあないわ、ね」
乱れる金糸の髪を撫でつけながら、金の君は唇を噛む。夢の中で見た人影は、かつての銀の界の王子のもの。彼は記憶の欠片も残さず、この界へ転生したはず。本来ならば、金の君の夢の中に現れるはずはないけれど・・・。
「彼の時間が残り少ないのは事実でしょうね」
歪められた理の代償、また前世の報いであるのか、彼のこの界での生はとても短いものと定められていた。
それを初めて会ったときから、彼女は知っていた。その時がいま、訪れようとしている。
知っていても・・・動揺せずにはいられなかった。
「時間はあと少し。ならば・・・」

彼に問いかける時間くらい、あるでしょう。金の君は呟き、目を閉じる。かつて分かたれた半身から言われた言葉が脳裏をよぎったけれど、それには敢えて気付かぬふりをして。
夜の闇、夢の境目を翔けて、彼に問いかけるために。

早く早くとせかす声。
早く行かなくちゃ、追いつかれてしまう。もっと速く、もっと遠くへ。
声に背中を押されるように、後ろも見ずに駆け続けていた。
でも。
何処へ行けばいいんだろう。どうして急いで行かなくちゃいけないんだろう。
過った疑問に、駆けていた足を止め・・・振り返ってしまった。

「追いついた」

冷たく笑う声が聞こえた。今まで真後ろにいたかのように、自分の目の前から。

「見つけちゃったよ」

残念そうにすら聞こえる声の主は、まるで鏡を見ているかのように。
自分と同じ顔をしていた。

はな

「・・・あんたって、こんな時にだけ笑わなくても、いいじゃない」

目を閉じた白い顔。柔らかな金の髪は緩やかに波打ちながら、その面を縁取り、長い金の睫が目元に影を落とす。名を呼べば今にも目を覚ましそうに思えるほど、穏やかな顔で彼は眠っている。口元には笑みすら浮かべて・・・そう、そんな微笑みなど。

「あたしたちは気付いていたわよ。あんたが本当は笑ってなんかいなかったこと。見くびらないでちょうだい、何年姉弟やってたと思ってるの」

いつも斜に構えた笑い方しかしない弟だった。家族の前では明るく楽しそうに振るまっていたけど、そんな見かけに騙される自分たちではなかった。何故と問い詰める事は簡単だったけど、それで答えを得られたとしても、互いに虚しいだけだ・・・もし、彼自身が答えを持っていなければ尚更。

ならば・・・いつか、楽しいことしたいこと、そんなものがあの子に見つかればいいのにと、姉妹でこっそり話し合っていた。そうすればきっといつか、本当の笑顔も見られると。

好きな人でも出来ればきっとね、と言ったのはあたしと妹で、兄たちはやりがいのある仕事でも見つかればなどと言っていた。どんなきっかけでもいいから、あの子が笑ってくれるようになればいいと願っていた。

それまで、あたしたちはいつもどおりの“変わらない家族”でいようと。

職人の父に、しっかりものの母、すこしお調子者の双子の兄、口やかましい姉に、おっとりした下の姉。

変わらない場所を作って、待っていようと思った。

いつか“その日”が来る時まで。

一番下の弟を、みんな密かに気にかけていたのだ。けしてあの子には言わなかったけれど。

少しずつ少しずつ・・・綺麗なばかりの造花に、命が宿るように。すみずみまで力が満ちるように。

あれは・・・いつから、だったのだろう？

ねえ、好きな人でも出来たのよきっと。いややっと仕事が面白くなったんだよ、親父も言ってるからなあ、あいつの腕は凄いって。兄弟は口々に言い、そして最後に部屋に入ってきた弟に慌てて取り繕った。

少しずつ変わってゆく様子に、安心したのは・・・そう遠い日では、なかったのに。

今、白い花に埋もれて眠るのは。微笑みすら浮かべて・・・眠るのは。

「あたしたちにそんな顔見せてくれるのは、こんな時だけど・・・ねえ、他の誰かにはちゃんと笑った顔見せた？笑いかけてもらった？ふふ、・・・きっとそうに違いないわね。あたしたちの知らない誰かが、あんたにそんな顔をくれたんでしょうね・・・よかったわ」

笑い方も知らないままでなくて。

本当はもっと沢山笑うところを見たかった。笑い方を教えてくれた誰かの事も聞いてみたかった。問い詰めて追及して、囃し立てて・・・困らせてみたかった。

あんたは怒ったかもしれないけど、それすらもいつか笑い話に出来たでしょう。

そんな・・・断ち切られた可能性を・・・何度も考えてしまうけど。

「ねえ、あんたはどう思っていたか知らないけど、あたしたちは皆、あんたの事好きだったのよ」

冷たい白い額に唇を落とし・・・最後の白い花を胸元へそっと置く。

「・・・お姉ちゃん・・・」

泣きはらした赤い目で、妹が扉の影から顔を出した。

「お花、入れ終わった所よ」

そう、と妹は呟いて弟が眠る傍らに膝を着く。両の目からはまた涙が零れそうになっていた。

「兄さんたちは？」

「・・・お客様たちのお相手してる・・・」

泣くまいと堪えて話す声は、喉の奥で変な風に掠れ、ますます妹は唇を噛み締めた。ねえ、とあたしは妹に話しかける。これは確かに悲しいことだけど・・・でも。

それでも。

「ねえ・・・この子の顔見てよ。笑ってるじゃない・・・きっと、いい夢でも見てるのよ」

「見てる・・・のかな・・・・。そうだったら、いいね・・・」

「きっと、そうよ・・・」

妹の肩を抱くと、堪え切れなくなったのか、再び静かに涙を零し始めた。はらはらと花の上に降る雨のような・・・大粒の涙を痛ましく思いながらも、あたしは胸の内で呟いた。

『おやすみなさい、いい夢を』

やくそく

空は高く青く澄み、渡る風は甘い。森の緑を透かして降りる光は、朝露を宝石のように煌かせていた。

柔らかい下草を踏み分け、森の奥へと入ったジルファは、木々が途切れ広場のようになった場所で、ようやく探していた相手を見つけた。

「こちらにおいででしたか」

光そのもののような、見事な金の髪、宝石のような瞳の・・・彼女はゆっくりと振り返る。

「なあにそんなに慌てて。何か問題でも起きたのかしら？」

「いいえ特には・・・」

「ふうん、珍しいわね。最近はすっかり銀と狭間の界に行ったきりで、こちらには顔も見せないのに」

笑う彼女はいつもと変わらず、それにジルファは内心安堵する・・・そうだ、彼女は銀の界の彼とは違う。たとえ心を揺らしたとしても・・・それを界へと影響を及ぼすような事はしない。それを知っていながらも、ジルファは取るものも取りあえずここへ渡ってきたのだ。

私は何を心配していたんだろうねえと、長いくすんだ金髪をかきあげている間、金の君はベンチのようになった石に腰かけ、目を閉じて顔を空に向けていた。光を浴びる花のように。

その身にまとうのが・・・常の白い衣や金の首飾りであったなら・・・白金の花のようであったろう。

けれど今彼女が身にまとうのは黒い衣。腕にも足首にも、胸元にも装飾品はなく、金の髪じたいが豪奢な装飾品のようだった。金の君の宮では、今まで見たことが無い姿にジルファは言葉を失くす。

「御方さま・・・その、衣装は・・・」

「ああ、これね・・・やだ、そんな顔しないでちょうだい。別に喪

服のつもりじゃ、ないんだけどね・・・」
　金の君は苦笑して金の髪を揺らす。自分の心を捉えかねているような様子だった。髪を一房指に巻きつかせ、首を傾げていた。ジルファとしても特に明確な答えを求めたいわけではなかったので、先を促そうとはしなかった。金の君の白い指先に嵌る、ビーズの指輪を眼にするまでは。
「おや、これは可愛らしい指輪ですね」
「ふふ、そうでしょう。もう随分と前に、可愛らしい子がくれたのよ。顔、真っ赤にしちゃってね・・・そりゃ可愛かったわ」
「・・・それは、もしかしなくても・・・」
「そう、あの子がくれたの。わたしのどの指に嵌めても大きすぎるんだけど、ちっちゃい子が一生懸命作ったんだと思うと捨てられなくてね・・・ずっと持ってたわ」
　あの子は、こんなもの私に贈ったなんて、忘れてるでしょうけどと左手の薬指に嵌る指輪を日の方に翳し・・・笑う金の君に、ジルファは言った。
「黒い衣を身にまとって、彼から贈られたものを身につけて・・・それが貴女の送りの儀式ですか」
「さあ？単なる気分の問題よ。別に大袈裟なものじゃないわ」
貴方が何を心配して此処にきたか、判っているけど・・・御覧なさい、貴方が懸念するようなことは、何一つ起こってないわ。
　確かに・・・とジルファは常と変わらない、平穏な・・・うつくしい風景に目を細める。
不穏な気配など欠片もない、穏やかな・・・昨日もそうであったように、明日もこの穏やかさが続くと、確信のように思える景色が広がっていた。
金の君は再び目を閉じる。その様子に、ジルファは引き時を感じた。
それではあと一つだけとジルファは尋ねた。
「彼は・・・再びの転生を望みましたか」

ジルファが去った森の中で、溢れる光を身に受けながら金の君は小さく笑う。
「ねえ・・・少し考えればわかるじゃない。あの子がそんなこと望むはずないって」
あの子の意識が沈む前に・・・時の隙間で問いかけた。転生を望む？私にはその力があるわと。
力があっても・・・それは使うべきでないもの。いつかは理を歪めかねないもの。既に一度理を歪めてこの界へとやって来た彼に・・・更なる負担を与えかねない問いかけであったけれど。
頭で考える前に、言葉が口をついてでていた。
あの子は一瞬目を見開いて・・・それから。名前の通りの・・・美しい花色の瞳で笑ったのだ。

『いや・・・俺は流れに身を任せるよ。いくらあんたにその力があっても、それは使っていいものじゃないんだろ？違う？』
『その通りよ。いわば裏技ね』
『なら・・・俺は要らない。いつか正攻法で、あんたに会いにいくよ』
『会いにいくって・・・』
『魂がこの世を巡るなら・・・いつかあんたに会える時が来るかもしれない。巡る流れに身を任せて、そしてこの流れがあんたのとこに繋がっているって・・・夢を見るのは、俺の自由だろう？』

そして彼は金の髪を一房掬い、誓いのように口付けた。
『あんたに、いつか会いに行くよ』
『ええ・・・ええ、いつかその時が来るのを待ってるわ』
その言葉に、彼は輝くような笑顔を返したのだった。

森の中を風が吹き抜けてゆく。空は高く青く・・・鳥の声があたりに響く。変わらぬこの界の風景だった。
彼はいつか転生するだろう。ただその時がいつなのか金の君にも判らないし、この界に生まれるのかもしれないし、違う界へと転生するのかもしれない。通常の流れに戻った以上、それは金の君にも、手出しできぬ領分だった。

「ねえ、あなたは判っているのかしらね？私にその約束をさせた意味を・・・」
相変わらず酷い男なのねと苦笑する。それでも、自分はそれに頷いたのだから、酷いとも詰れない。
まあいいでしょう・・・約束、したのだから。

「ねえ・・・いつかの日が来るまで、私は此処に居るわ」

不変を守る理由のひとつが出来たのだから。

伝言

神は作られた宮には住まぬという。

まことその言葉の通りであると、稀なる方の住居を訪れるたびに何度も思う。稀なる方の住居にふさわしく、おそらくはかの方の興や気分によって在処を変え、また外観すら変容する。

そのように唯人には想像もつかぬ在り方をする稀なる方の住居であるゆえ、唯人には辿りつくことなど不可能と思えるのだが、何の不思議あってか、毎年かの方のもとへ参上する時期になると、導かれるように道が開くのだった。

道行は必ず一人、隧道のような道をゆき、辿りついた先で見上げるかの方の住居は、見るたびに様相が異なっている。華やかで煌びやかな意匠が凝らされている時もあれば、簡素な石造りの時もある。薔薇色の石がふんだんに使われた住居であったときは、何ともはなやいだ雰囲気であった。

しかし。一抱えもある箱を抱え直し、見上げる先にあるものは。

誰をも寄せ付けぬような、高い塀に囲まれた建物は・・・まるで灰色の砦のようだった。

さて、一体稀なる方に何が起こったのだろうと眉を潜めつつ、訪れの声を上げたのだった。

広い宮の中は、その広さに見合わぬほど人気がない。現に、自分を出迎えるのは決まって同じ女性だった。

年に一度顔をあわせる女性は、既に初めて顔を合せてから短くはない年月が経っているにも関わらず、少しも容貌が変わった様子はない。稀なる方は当然ながら、そしてかの方へ仕える彼女もまた、唯人とは異なる時を生きるものかと内心目を瞠っている。

此の度も彼女によって宮の中を案内される。天井も柱も、見憶えて

いたものは一つとしてなく、くすんだ灰色の石造りの宮には、重ささえ感じられるような静けさで満ちていた。
長い回廊を彼女に従って歩きながらも、己の足音ばかりが高い天井に響く。いくつかの角を曲がった後、天井に届くほどの大きな扉の前に出た。植物や動物の意匠が紋様のように浮き出た、いかにも重厚な扉だ。
その前に立ち、彼女はよく透る声で、稀なる方に告げた。
「御方様、客人を案内してまいりました」

稀なる方は長椅子にしどけなく凭れていた。眩い金糸の髪を一筋も結わず、華奢な背中に流している。花の色を映したような唇は笑みの形を作っていたが、どこか物憂げであった。
「いらっしゃい、今年はどんな美しいものを作ってくれたのかしら」
白い腕に招かれるままに歩を進め、御覧下さいませと箱の蓋をとり、中身を取り出して大きく床に広げた。
大きさにして人二人分が両手を広げたほどの大きな一枚布。
精緻な紋様が織り込まれ、また色糸が縫いこまれ、ある場所は染められた・・・染織を生業として長い己ですら、眼を瞠る出来の布だった。
ほうと感嘆のため息が朱唇から零れる。
「これはまた見事な出来ね。とても気にいったわ。ありがとう・・・・・でも」
稀なる方は腕を伸ばして、布を引き寄せる。意匠をじっと見つめ、稚い少女のように首を傾げた。
「とても素晴らしいわ・・・でも、変ね、あなたが毎年作ってくれたものとは、違うように思うんだけど」
稀なる方の言葉に、実はと目を伏せて答えた。やはりこの方は気付かれたかと思いながら。
「実は、此の度のものは、私が意匠を考えたものではありませぬ。もちろん、私の工房によって作られたものには、間違いありません

が。あなた様が手にされているそれは」

『もしも、捧げるに足ると思うなら、どうか』

「・・・わたしの息子が、意匠を考え、織や染め、縫いなどの細部にわたって指定したものです」

そう、と稀なる方は呟き、紋様や刺繍を白い細い指で辿ってゆく。

「とても綺麗だわ」

「お気に召していただけて、嬉しく思います。実は息子は他にも意匠を残しておりまして・・・もし貴方様さえよければ、来年も再来年も、息子の意匠で作りたいと思うのですが」

『もしも、捧げるに足るものと思うなら、どうか・・・あのひとに』

「・・・ええ、いいわ。貴方の眼鏡に適うからこそ、貴方は息子さんの意匠で作ったのでしょう？そうであるかぎり、私に否やはないわ。また来年も、こんな綺麗なものが見られるのは、とても楽しみなことだわ」

稀なる方はゆったりと微笑んだ。

「ありがとうございます。では、息子の残した意匠を超えるものが出ない限り、わたしはそれを使い続けるでしょう」

「そう・・・楽しみだわ。それにしても、本当に見事なものね。私だけが目にするには、おしい才だわ。世に出せば、長く名を残すこととなったでしょうに。今からでも世に問うてみる気はないの？」

「いえ。どうか、貴方様だけにと。それが息子の望みでした。私はそれを叶えてやろうと思います。そもそも、何かを望むこと、願うことなど、滅多にしない息子でした。ならば余計に叶えてやらねばと思いますので」

そう、とため息のような呟きをこぼし、稀なる方は睫毛をふせた。
自分には息子と稀なる方の関わりなど知らない。息子が残した意匠だと言った時、かの方は疑問を差し挟まなかった。息子がこの世にいないことを知っているのだ。どんな関わりがあり、なぜ息子はあまたの意匠をかの方へ捧げるためだけに残したのか・・・その理由を知りたいと思っていたけれど。
聞かなくても、わかる気がした。そもそも、意匠を読み解けばおのずと答えはあったようなものだ。
寿ぎや吉祥など、様々なめでたき意匠で満ちたもの。そして秘かな伝言のようにちりばめられたもの。
ただ読み解いてしまうのは、あまりに無粋なやりようだろうと思われて、あえて読み解きはしなかった。それでよかったのだと・・・かの方を前にして思う。
この布は・・・そして、作られるのを待つ沢山の意匠はすべて、かの方へ何事かを伝えるためのものであろうから。

「それでは、あなたさまもどうかお健やかに」
「ええ、あなたも。来年を楽しみにしているわ」

案内の彼女に先導され、宮の中をもと来た方へ歩く。高い天井に自分の足音ばかりが響くなんとももの寂しい様子であったが、どこか違和感を覚えて首を傾げた。
すぐに違和感の正体がわかった。陰鬱な灰色に満たされた宮の中は、いまほの白く光るような色あいの・・・やわらかな石に似た造りに変容していたからだ。
雲間から光が差し込んだかのような様子に、思わず笑みがこぼれた。

どうかどうか、稀なる方よ。
いつまでも健やかに。
あなたさまへ届けられるモノが、これからも何事かを物語ってくれるでしょう。

モノガタリ

いつもは機織りの音が規則的に響き、糸や布を染める染料の匂いや蒸気に満ちた作業場も、いまは人影もなく静まり返っている。大きく採られた北向きの窓からは、やわらかな夕暮れ時の光が零れおちている。

道具類はきちんと仕舞われ、隅々まで掃き清められ、次に使われる時を待っているようだった。

ただ一つだけ、ぽつんと糸巻きが作業台の片隅に転がっていたのを拾い上げ、元あった場所に片づける。

普段は何とも慌ただしくて、人の声で賑やかな場所が、こうも静かであるとまるで違う場所に来たかのように感じられてしまうのだけど。見慣れた筈の場所も、まるで知らない場所のように。

羽を休める鳥のような機織り機を指でなぞり、ふと視線を上げた先。

そこには天井に近いほどの高さで渡された太い紐に、人二人が両手を広げたほどの、大きな一枚布が掛けられていた。

見事な織と染めの布だ。

この布を完成させるために、ここしばらくは自分を含め、数人がかかりきりになった。考案された意匠どおりに作るにはどうしたらいいか試行錯誤を繰り返した。たくさんの失敗もけして無駄ではなく、成功の過程で見つけた技は、今後にも活かせるものではあるだろう。

見事な出来栄えだと、これなら必ずやあの方もお気に召すだろうと、ここの主である自分の父は満足そうに頷き、献上する品が出来上がったあとには、常にそうであったように二日の休みを職人の皆に言い渡したのだった。

休みの二日目である明日は、父とともにこの布を納めにゆく。毎年毎年、意匠も織も異なる布を一枚ずつ、稀なる方へ納めにゆくの

が、自分の家・・・染織を生業とするこの家に与えられた栄誉であった。
確かに栄誉ではあろう。染織を生業とする誰もが、かの御方に献上できるわけではない。それを声高に告げることも許されてはいる。家の者の気風から、そのような真似はしないけれど、どれほどの財を積んでも得られるものではなく、また望んでも得られないものだ。それにしてもと完成した布を見上げる。織と染めで鮮やかな花や鳥を描いた、うつくしい布。
世に出せば、どれほどの価値で取引されるか、どれほど多くの者が欲しがるか想像もつかない。
けれど、これは世に出ない。ただ一人のために作られ、捧げられてしまうからだ。
その素晴らしさを知るのは、作成に関わった者のみだ。関わったものは、己はこれ以上のものが作れるのだろうかと、嫉妬にも似た思いを持ち、また或いは己では到達できない高みにいる作品への憧れで胸をやく。
それほど素晴らしい作品であるのに・・・意匠の作り手は、世に問うてみようと思わなかったのだろうか。
他者へ捧げるためだけの、世に知られることを望んでいない多数の作品。
自分が真似ることすら難しいそれらは・・・自身の持つ価値を全く知らないようで。

先行きが楽しみな才だ。
そう人から褒められても素直に喜べないのは、自分より格段に優れた才を知っているからだ。
自分が足元にも及ばないその才を・・・己を褒めた者が目にしたら、なんと言うだろう。
きっと、“なんと素晴らしい作品であることよ”と感嘆するに違いない。

明日稀なる方へと献上される布。二度と人目に触れぬ布。
それをどれくらい、ぼんやりと眺めていたのだろう。後ろから不意に声がした。
「今回もいい仕上がりだ」
「・・・じいちゃん」
振り返ると、火のついてない煙管をくわえた祖父が、柱に凭れて布を見上げていた。
前の工房主である祖父は、自分の父である息子に店を譲った後、これからはゆっくり自分の好きな物を作るさと、作業場の片隅で何やら拵えていることもあれば、ふいっと何日も家を空けることもあった。悠々自適の隠居生活を楽しんでいるようだった。父とは違うその自由気儘さが自分はとても好きだった。

この数十年の間、稀なる方へ捧げられる布の意匠は、たった一人によって考えられたものだ。
その作り手は、この祖父の弟であるという。
若くして亡くなったというその人は、今後も十数年に渡って献上できるほどの、あまたの意匠を残している。
自分の家の工房に、けして紛失したり焼失したりしないよう、厳重に保管されているそれらを初めて目にした時、意匠の夥しさと素晴らしさの両方に、自分は打ちのめされた。そして、年月を経ても少しも色あせない意匠は、見るたびに驚嘆するものだった。
誰の目にも触れないそれら以外では、今では店の看板のようになり、広く世間に知られるようになった意匠も、その人が作ったものだった。それなのに、その名は世には全く知られていない。若くして亡くなったと言うなら、何を思い数多の意匠を短い生の中で作ったのか。何故名を残すことを考えなかったのか・・・一体、どのような人だったのか・・・完成した布を見上げていると、そんな思いが浮かんできた。
「じいちゃんの弟って人が、これを考えたんだろう？どんな人だっ

た？」
「ん・・・ううん、そうさ、なあ」
祖父は腕組みをして、首を傾げた。そのまま言葉は続かず、自分は重ねて問いかけた。
「これほどのものを作れたのに・・・捧げるだけで、他の誰にも知られなくていいだなんて・・・世に出してみようとは思わなかったんだろうか」
そうさなあと祖父は笑った。
「そういう望みは持てなかった奴だからなあ・・・作らせてみたら、誰より綺麗なもの作ったくせにな。残した意匠だって、十分な時間があれば自分で作りたかったんだろうな。名を残したいとか世に知られたいとか、そんな事はちっとも考えない奴だったよ・・・まあ、それでも」
祖父は言葉を切り、美しい布に目を細めた。
「こうしてまた会える、身内にとっては幸いなことだ」
笑う祖父に、それ以上は何も聞くことは出来なかった。聞く必要は・・・おそらく、ない事だった。

再び、ひとり布を見上げる。これは自分が作る物とは、在り様が違う作品だ。
世に出る望みはなく、埋もれていたいと願うわけでもなく。
ただ・・・静かに何事かを語りかける・・・モノガタル。その意匠で、色彩で、織り込まれた紋様で。
ああ、まるでひそかな、恋文のようだ。

そして恋文ならば。
他の誰の目にも、触れたいと思うはずもない。

思いついた考えに苦笑しながら、暗くなり始めた作業場を後にした。

だれもしらないはなし。

市場で迷子になって、男の子はとても心細くなりました。
これまで見たことがないほどの沢山の人がいます。人がまるで波のように、後から後から途切れることなく続いているのです。さっきまでお兄さんとつないでいた筈の手は、手のひらの先には何もなく、小さな自分の手をぎゅっと握りしめていました。
誰かに話しかけようにも、その誰かの耳は自分の頭の遥か上です。周りはざわざわと煩くて、声を張り上げないと聞こえないでしょう。それなのに心細さから男の子は小さな声しか出せないのでした。それではだれにも声は届きません。
泣きそうになりながら話しかけ続けても、誰も気づいてくれません。
それどころか、男の子の小さな体が見えない大人から、路地の隅へはじき出されてしまいました。
服についた土を払いながら起き上ります。朝、市場へ出かける時には綺麗だった服は、土や埃で汚れてしまいました。おかあさんが、あんたの目の色と同じ服ねと言った、青い服です。
おかあさん、おにいちゃん。みんなどこなんだろう。
転んだ拍子に手のひらを擦りむいたみたいで、じくじくと痛みます。それでも男の子は泣きませんでした。
そんな男の子に、声をかけた人がいました。おひさまのような髪の毛の、とても綺麗な女の人でした。
その人は男の子が迷子だと知ると、一緒に探してあげると言いました。男の子が家族を見つけやすいようにと、肩車をしてくれました。
やがて、男の子は家族を見つけましたが、いつの間にか女の人はいなくなっていました。
あの人になにかあげたいなと男の子は思うようになりました。

初めて市場に行った時は迷子になりましたが、今ではもうそんなことはありません。今でも家族と時々市場に行きます。そして何回かに一度、あの女の人に会えるのです。いつも会えるのではありませんが、会えた時は嬉しくて、色んな話をしました。

おひさまのような長い髪の毛をいじらせてもらったりもします。あっという間に時間は過ぎて、男の子の名前を呼ぶ家族の声に振り返れば、もう女の人はいないのでした。

それを少し・・・そう、さびしいと思うようになったのです。

何をあげたらいいだろうかと男の子は思いました。

市場へいっても、必ず会えるかどうか、わからない人です。花は枯れます。お菓子は腐ります。男の子が困り果てているとき、友達の女の子はいいました。指輪をあげたら喜んでくれるに違いないわと。

本当かなあそうだったらいいなあと思いながら、男の子は女の子と一緒に、ビーズの指輪を作りました。

きらきらと光を弾く指輪は、少し歪んでいましたが、とても綺麗に思えました。

市場で女の人に会った時、男の子はポケットを探りました。ちゃあんとビーズの指輪が入っています。女の人が話しかけてくる前に、男の子はポケットから手を出し、これをもらってくれるかなと言いました。

女の人は目を丸くしながらも、ありがとうと言って手を差し出してきました。男の子は首を傾げます。すると女の人は笑って、指にはめてくれるかしらと言いました。男の子は、ビーズの指輪を女の人の白い指に嵌めました。どの指に嵌めても大きかったのですが、薬指に嵌めてあげました。

それを嬉しそうに女の人は空にかざします。

女の人が嬉しそうだったので、男の子も嬉しくなりました。

市場でだけ会う人は、その人だけではありません。市が立つとき

にだけ商売をする人や、買い物にくる人など、様々います。ただ、その人だけは・・・まるで年を取らないのです。何度も何年も市場で会ううち、男の子は・・・かつての男の子はとうとう、女の人に聞いてしまいました。

あなたは一体何なんですかと。女の人は笑って答えません。反対に、なんだと思うと尋ねました。

かつての男の子は、答える事ができませんでした。

おひさまいろの髪も、綺麗な白い手も、美しい顔も、初めて会った時から少しも変わってないように思うのです。

アヤカシだと思うかしら、それとも魔物かしら。歌うような声に、かつての男の子は首を振ります。

恐ろしいとか厭わしいとか、ちっとも思ったことはありません。ただ、不思議に思ったのでした。

姿の変わらない、美しい人を。

女の人は美しい笑みを浮かべたまま、とても残酷な事を告げました。

もうわたしは此処へは来ないわと。かつての男の子が何も言えないでいるうちに、そっと前髪をかきあげ、露わになった額に紅い唇を落とします。これはあなたが無事に大人になれるようにとのおまじない。元気でいてねと言い残し、何処ともなく姿を消したのです。

かつての男の子が辺りを探し回っても、美しいその姿を見つけることは、とうとう出来ませんでした。

それから。何度かつての男の子が市場を訪れても、女の人には会えませんでした。

季節が一つか二つほど廻った頃に、かつての男の子はもう市場へ行くのを止めました。もう二度と会うことはないのですから、会えないのですから・・・もう忘れてしまおうと思ったのです。

聞いたはずの女の人の名前も、話した沢山のことも。贈り物をしたことも。

けれど、かつての男の子が忘れても、覚えている人がいました。男の子の友達の女の子です。

女の子は、あの時の指輪はどうしたのかしら、ちゃんとあげたのかしらと尋ねたのでした。成長した女の子は遠くへお嫁に行くことが決まっていて、旦那さんになる人から貰った指輪を見て、昔の事を思い出したのです。

男の子は、心の奥へ仕舞いこんでいた女の人との思い出を、少しずつ思い出しました。

話した事や、笑いあったこと。溢れるほど後から後から思いだされます。そうして、ふと思いつきました。

もう何年も行っていない市場へ、行ってみようかと思ったのです。

勿論、あの人に会えるなどとは思っていません。あの人はもう来ないと言っていましたし、あれから長い時間が過ぎています。それでも、あの場所へ行かなくてはと思ったのでした。

久しぶりに訪れた市場は、相変わらず賑やかでした。小さな頃は頭の上を飛び交う会話が怖くもありましたが、大きくなった今では、そんなことはありません。

あちこちの店を冷やかしながら歩き、いつも女の人と会っていた場所へとやって来ました。そこは市場の片隅で、石造りのベンチがあるところです。市が立つ路に背を向ける形のその場所は、人通りもなく、かつての男の子と女の人は、男の子の家族がやってくるまで話をしたり、果物をかじったりしていたものでした。

石造りのベンチが幾分古びた他は、まるであの頃と変わった様子はなく、かつての男の子は不思議な気分になりました。ここで待っていると、あの路地から、おひさまいろの髪の毛の、美しい人が今にも顔を出しそうで。

男の子は息を飲んで後ずさりしました。まさに路地から、おひさまいろの髪の毛の人が、姿を現したからです。

うつくしく微笑みながら、彼女は言いました。あなたが呼ぶ声が

聞こえたのよと。
　かつての男の子は茫然と立ち尽くしました。彼女は見憶えていた頃の姿のまま、少しも変わった様子がありません。
時間は彼女の上に流れていないかのようです。小さな男の子であった自分は、彼女の背を超すほど大きくなったというのに、です。
　ねえ、あなたはわたしをなんだと思う？アヤカシ？それとも魔物？
それは、かつて彼女が男の子にした問いでした。
　かつての男の子、今は青年となった彼は、笑って・・・心から答えました。
あなたが何だっていい、ただ・・・そばにいてほしいんだと。
　彼女は笑って答えました。あなたが望む間は傍にいるわと。

　それはだれもしらないお話です。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7287u/

イノセンス

2011年7月29日00時29分発行